

秋んど祭りに参加して

久米南町立久米南中学校

二年生 佐々木 統亮

ぼくが住んでいる久米南町では、人口減少と高齢化が進んでいる。そんな久米南町で地域に協力し、町の活性化を図るために活動してきている地域おこし協力隊の方がいる。ぼくはもともとそういう方や制度があることすら知らなかった。あるとき、同級生から「秋んど祭り」という地域のお祭りの手伝いに誘われた。はじめは何なのかよくわからなかったが、友達と一緒に過ごせるので、楽しそうだなという軽い気持ちで行くことにした。

町役場の一部屋に、地域おこし協力隊の方と友達数人で集まった。そこで、お祭りを出す店の看板づくりをしたり、子供たちが引くくじを作ったり、お祭りで配るハンカチのデザインを考えたりした。そのハンカチには久米南町のイメージキャラクターをのせる予定だった。友達と作業をしながらのようなデザインにすればお祭りに来てくださる皆さんに久米南町を宣伝できるか、お店に気付いてもらえるかを

考え、話し合いを共有し、またお祭りの当日のような接客や声かけをすれば、お客さんを引き付けられるかを考えた。時間が少ないなかでみんながふざけずに話し合い、決めていく姿を見て「みんな、ここぞというときにはやれるのだな。」と感じた。地域おこし協力隊の方は、ぼくたちが話しやすい空気を作ってくれ、ぼくたちの意見をうまく取り入れて、新しい案を出してくれたりした。ハンカチのデザインが二パターン完成し、ぼくはお店で売るお菓子の数を決めて、それに対する利益を計算した。

お祭り当日、会場に手伝い係として集まって、地域おこし協力隊の方々にお祭りのスケジュールを説明していただき、役割を確認した。看板立て、お菓子の品出し、価格の表示、くじ箱やかごの設置をし、ぼくたちが考えたデザインが印刷されたハンカチも並べた。素敵なハンカチに仕上がっていてうれしかった。僕たちはスタッフ用のエプロンを着てお客さんを待った。お祭りが始まってすぐはお客さんが少なかったが、時間が経つごとに子供連れが増え、一人また一人とお客さんが来てくれて子供からお年寄りまで幅広い方々がお店に来てくれた。ぼくは、駄菓子の販売と接客を中心に動いた。子供たちには好きそうなものをすすめたり、大人の方には雑談をしながら接客をし、だんだん慣れてきて声かけがうまくできるようになった気がした。お菓子もたくさんの方に買っていただけた。

お昼になると、近くの小学校で活動していたスポーツ少年団のみんな

ながやってきた。お腹をすかせた様子で、お菓子を無我夢中でかごにのせて、親に「買ってー!」と頼んでくれていた。ぼくたちのお昼は、昼食を食べる組と接客をする組とで分かれて交代した。

お昼を過ぎたころ、ステージで踊る時間があった。これはお店の宣伝のチャンスだと思い、友達全員でステージに上がり楽しく踊った。踊りの後、運営の方にマイクを貸していただき、何がいくら残っているかなど、お店の宣伝をすることができた。

お祭りも終盤にさしかかって、売れ行きを確認し、声かけを続けた。デザインしたハンカチも順調に売れ、たくさんの方の手に渡ったと分かってとても感動した。お祭りの運営スタッフの方が、中学生が中心にお店をするぼくたちのことを気にかけて、何度も見に来てくださったことも心強かった。

お祭りが無事に終わった後、地域おこし協力隊の方がぼくたちをねぎらいお礼を言ってくださった。けれども感謝するのはこちらの方だ。出店の企画から販売までをやるのは初めての体験だったが、楽しくのびのびやらせてくださった。地域おこし協力隊の方が声をかけてくださったおかげで、自分たちで考え、意見を出し合い形にし、たくさんの人に見てもらい喜んでもらえる楽しさと、疲れたけれどやりきったという達成感を味わうことができた。久米南町は人口四二〇六人の小さな町だけれど、地元の方だけでなく、移住してきてくださった方、今回お世話になった地域おこし協力隊の方などたくさんの方が町をよ

り良くするために、色々なことを企画し盛り上げてくださっていることを知れた。今まではイベントやお祭りにただ行って楽しむだけだったが、お客さんを招く側としてお祭りに参加してみて、これから自分も町に何か貢献できたらいいなと思った。